

## 女性リーダー座談会(1/2)

現在お茶の水女子大学では、学長のほか、部局長クラスのポストの半分近くを女性が占めています。この女性リーダーの皆さんに集まっていただき、お茶大の現状や課題について話し合っていました。座談会は九月九日の夜、学長室で行われました。

### 出席者

- 本田 和子 学長
- 篠塚 英子 学長補佐(今回の司会)
- 波平 恵美子 ジェンダー研究センター長
- 平野 由紀子 人間文化研究科長
- 内田 伸子 子ども発達教育研究センター長
- 室伏 きみ子 理学部長ライフワールドウオッチャーセンター長

篠塚 まず、現在の仕事のやりがいやご苦労について、また、学生及び一般の女性から、ロールモデルとして期待もされていると思うので、そのことについてもお話しただきたいと思っています。

室伏 理学部というのは、いわば男性の城のようなところで、理学部長会議に出席しても女性は一人居りです。それで、皆様は助けてあげようと思っただけで、苦勞するということより、かえって得をしていると思うことが多いですね。ただ、お茶大だけでなく、せめて奈良(女子大学)でも女性学部長が出て欲しいなと感じます。場さえ与えられれば多くの女性は、はつらつと頑張れると思います。女性がその社会で活躍するためには、まわりがもう少し、女性に場を与えると言う気持ちが必要だと思えますね。

平野 私は五十代の始めに学部長になりました。文教教育学部ではじめての女性学部長です。

篠塚 研究科長も女性で初めてでしょ？  
平野 大学自体が変わったのだと思いま



平野研究科長

すね。生活科学部も理学部も女性学部長が出ていましたが、文教教育学部だけが女性学部長がいまませんでした。

本田 あの頃から少しずつ学内の空気が変わったのではないのでしょうか。お若いけれども、卒業生で立派な方を、とにかく票をいれちゃえと、票が圧倒的に集まったと聞きましてから、私達は他学部で、あーやっただいという気がいたしました。

平野 学部長の時も今もそうですけれども、足を引っ張るとか、そういうことは一切ないですね、ご自分たちで選んだからということがあるかもしれないけれども、本当に風通しのいい大学だと私は思います。ただ、過去には選挙で選ばれながら、暗に辞退を求められたという女性の先輩もおられたと聞いています、学部長選ではないのですが。そういう意味では本当に先生方も変わったんですね。

波平 女性としての苦勞は全くありません。私は本学に来て学内の状況もよく分からないまま二年でジェンダー研究センター長になりました。最初にセンター長になった時に大学の組織図を見ましたら、生環研(生活環境研究センター)もジェンダー研究センターも組織図の中で空中に浮いているんです。省令研究センターであるにもかかわらず、大学のどこにも入っていない。センターの大学における位置づけをきちんとさせることに苦勞しました。前センター長の原ひろ子先生のなさったことに反対ということではけっしてなく、今までとは違うものにしなればIGS(ジェンダー研究センター)の発展はないと思えて、いろいろ工夫をしました。法人化で大変なことになるということはわかっていましたから研究センターであるという事を大学の中にも外にもハッキリさせる、センターの外向き内向きもハッキリさせる、センターの外向き内向きを一年はそれに費やしたと思います。館センター専任教員)さんも、伊藤(センター専



波平センター長

任教官)さんも、私の意図をよく理解してくれました。一番の協力者はセンターの補佐員たちです。安いお金で一・五倍から二倍位の働きをしてくれました。

それからもう一つは、部局長会議に出席する女性が一人だった時期がありました。最初の頃、概算要求の件で、センターの要求内容に対してある方が真っ赤になって怒って、「そうやってジェンダー研究センターは思いついて上がって侵蝕していくんだ」と怒鳴ったんです。で、私、前任の大学の勢いで「あなたにここでそういうことを言われる謂われはない」と反論したんですが、後になって、「お茶の水女子大学の「洗練された」マナーを知ること、今でも恥ずかしく反省しています。」

本田 私たちは中で育っているから気づきませんけど、これでもお茶大はエレガントなんですよ。世の中、大学教授といえども、もつと粗暴な方が多いんです。この方たちはお品がありますね。だからお公家様とお姫様の集団なんて言われるんですけれども。

波平 その一人一人のエレガントさと、大学空間のエレガンスのなさのギャップをある程度縮めることが、今後学生を集めて、外の評価を得るには大事だと思います。

篠塚 内田伸子先生、「誕生から死までの発達科学」COE拠点リーダーとして、また子ども発達教育研究センター長として、いかがでしょうか。

内田 一昨年の十月に、何とか附属学校を維持して、その知的リソースを生かして社会貢献の道を探れないかと本田先生からご提案をいただきました。そこで、以前から構想が出されていた、子ども研究の知見を集約して、教員研修などに貢献できるようなセンターを形にするために、附属校の先生方にも出てきていただいていた会合を重ね、昨年の四月に学内措置で立ち上げることができました。ただ、学内で認知されて、活動をしやすいようにと、省令センター化に向けて、七回ぐらい文科省に参りましたでしょうか。最初は「スリム化に逆行してる」と笑われましてね。しかし、



センター長 内田 直子

子どもの学力低下の懸念や、若年痴呆、ゲーム脳が社会問題化しているなど、説明しているうちに、段々と身を乗り出してこられ手応えが感じられるようになりました。ヒヤリングの度に、酒井先生や藤江先生が設置申請書を修正してくださり、事務局の会計課長の加藤さんや係長の岩田さんにも助けていただいていたんとか省令化されました。

今年からは「途上国支援の幼児教育拠点事業も加わったため忙しさが倍加したように感じます。私の役割はセンターの先生方が研究しやすい環境づくりに力尽くすことだと思っております。

COEの申請書づくりはセンター省令化の折衝の時期と重なってしまい、昨年の七月は土日なしの毎日終電の日々でした。その間に学会がありましたし、大丈夫かなという感じでしたけれど、専門領域の異なる先生方との研究内容に踏み込んだ話し合いを通して「協創」の場ができたことが何よりも嬉しいことでした。院生たちも実績をあげてくれていて、学会賞を取っている人が何人もおりました。それらをまとめて、なんとかヒアリングまで漕ぎ着けることができました。

採択された後は、まるで「手配師」のようにあちこちに頭を下げ、本田学長のところにも何度もご相談に伺い、助けていただきました。今は四つのプロジェクトが順調に走っております。今年度は事業費が申請額より4割も削減されてしまいました。どの大学もそのように困っておりますが、足りない分は、まずは先生方の研究にかける情熱と、次に、奨学寄附金や自前の研究費などで補填して、何とか納得のいく成果を出していけたらと思っております。

COEの事業の一環として院生のための教育セミナーを定期的に開いております。今年七月にはカリフォルニア大学のイシイ先生を招いて九時から五時まで三日間アカデミック

ライティングの講座を開いたところ九〇人もの院生が参加し、内容の濃い実に有意義な講座が行われました。ああいう授業を大学院教育にプログラム化していく事も必要だなと思いました。

かつては、文教育学部は確かに保守的で、私がお茶大に採用される頃には「女性を探るのは時期早尚ではないか」などという声もあつたとか。その後、次第に女性教官も増えてきて、平野先生が学部長になられた頃から雰囲気が変わってきたように思われますね。篠塚先生は、お母様も具合が悪かつたとお聞きしていますが、個人的にも大変だつたでしょう。

内田 そうですね。ですから、大学院生には、よく檄を飛ばします。女性は、「農耕型」の研究、種を蒔いて花を咲かせ、実を採るまでに時間がかかるような研究に向いていると思う。でも女性のライフコースには難題が山積している。だから先までも見通して、サポート体制を作っていくと、研究生活と家庭生活の両立は難しい、と。でも、それだけだと院生たちは元気をなくすので、藤原正彦図書館長がおっしゃっておられる、よい研究者になるための「四つの心構え」を言って励ましています。知的好奇心いっぱいであれ、野心的であれ、執拗であれ、そして何よりも、楽天的であれ、と。

篠塚 そうですね、あまり苦しい事はかり言ってしまうと、みんな引いちゃいますものね。楽しい事も織り交せてね。



本田学長

本田 皆さんのお話をうかがって、一つは、お茶大が、私がいなかっただ、ここ五、六年で急に空気が変わった事を感じますね。私がいる時から女性学長待望論はなかつたわけではないですが、多分その間に例えば佐藤学長やそれを取りまく執行部の方々、大口先生とかがある程度流れを作ったんでしょね。独法化を乗り切るためにとか、他にも危機意識や、

いろいろおありになるのかもしれないが、お茶大がお茶大らしく行くためには、好き嫌いに問わず女性をリーダーに選ばなきゃいけないって流れが、結果的にパツパツパツと女性リーダーが表に出てきちゃったんですよ。私も、あれよあれよという感じですね。よそへ行くと「お茶大はよくおやうですね、三五%が女性教員で、評議会には七、八人女性が出てらっしゃるそうですね」って言われると私も正直に「何となくそうなんじゃない、私がお茶大で、皆さんのような方なしでは夜も明けぬ大学になってきています。これも時代の流れでしょうが、その中で皆さんがちゃんと力を貯えて、外でも認知される方になつて下さつたって事がとてもありがたい事なんです。研究者としても皆さんそれぞれに凄腕でいらして。あとは、男の方々に、僕たちはお客様で、なんて思わせないように、お互いに支えながらやっていく事が必要かなと思います。

それから、室伏さんが女性で得をしている事があるとおっしゃいましたが、正直言って私もそうで、ジェンダー研究の方に言わせるとそれが甘えだと言われるかもしれないが、たとえば、目立ちますよね。全国的な会議で発言しても、私は女性の立場や視点で言っているつもりはございませんが、男の方がお聞きになると「女性の視点でさわかにかに異議申立をして下さるとけっこうです」みたいな事を言われるんですね。必要だけれども欠けていた部分を無意識のうちに選び取っているのかなという気もいたします。そういう役割もまだ必要なのかなと、それで、つい隙間狙いみたいになるんですね。

大学も、例えば「ジェンダー」とか「子どもから老人まで」とかが目立ってきたというの、他でもおやりになっている所もあるけれども、それをメインの研究にしてらっしゃらない。うちはお金の入ってくる所がございませんからみんなそろって貧しく肩を寄せ集めておりますなどと冗談を言うんですけど

も、そうやっていゝんな所で優れたものが出て来る、それで私はジェンダーと発達があつたら、もう一つ理系でも何か欲しい。そして三つでバランスをとりながら、それを目立たせて、基礎的な所もきっちりおさえていく、そんな大学になると小さくてもやっていけるし、よそ様をご覧になって、女子大も必要なのかなと思つて下さるのかなと思つております。お茶大は小規模大学の希望の星なんだそうです。そういう期待と誤解と錯覚は裏切らないようにというのが私のモットーです。皆さん優れた方がたくさんいらつしやるので、そういう方向に行けば何とか持ちこたえられるのじゃないかと思つております。



室伏理学部長

今、学長から理系でももう一つとお話しがありましたけど、ライフワールド・ウオッチセンターのお話をお願いできますか。室伏 私が理学部長になつた頃に、学内で「理学部はお金ばかり使つてあまり役に立たない」とおっしゃる方たちがいらして、皆さんに理系に立つものと考えていました。何か世の中の役に立つものとして、何かせの先生にお誘いいただいた、三水会という理工系の学長の集まりや、別の会合で、生活者の視点から安心安全を科学的にとらえて発信したい、そういった領域で活躍できる人材育成をしたいという事を申し上げましたら、皆さん、それは女子大でこそやるべきだととらえて下さつて、いつの間にか応援団ができてしまいました。本田先生にお話しいたしますと、心配なさらずおやりなさいとおっしゃつて下さるものから、一気に進んで、ついにセンターを作つてしまつたという事なんです。本田 得体の知れない事をよくおっしゃつて来るんです。私は、出る杭は育てようというモットーがあるものから、それではやつてご覧になったら、なんて言つたんですが、後で、あれは何なんだろうと思つたりしてたんです。(笑い)

室伏 学長が設立記念シンポジウムで小さな無人駅のプラットホームにスーパードライの得体の知れないものが、いつの間にか大きくなりました。皆様のご期待に添えるものにしていくためには、情報の集約と発信、ピュアな研究の進展、そして何よりも、附属も巻き込む形で教育プログラムの策定が必要で、現在、学内外の方たちとご相談しながら進めています。さまざま分野での第一人者をお招きして講演していただく「お茶の水学術サロン」という試みも十月一日から始めることになってます。



篠塚学長補佐

篠塚 何でもトップに直接行くのはマネジメントの観点からよくはないのですが、今回はいろいろの意味で学長の所に情報がワツと集まつて、スピーディに物事が決まりましたよね。本田 小さな大学ですからね、動ける所は動いた方がよいと思つてますね。ただ、私は組織化する事がへたなんです。だから、お気の毒なんですけど、市古副学長に押しつけて。それから、今回のように次々とセンターが立ち上がったたりしなければ、ジェンダー研究センターにもっと支援ができたのと思つて。前から苦労してらした方に申し訳ないと思つて、私がごさいます、あちこちから何やらおもしろいものが出てくるものから。篠塚 ジェンダー研究センターはすごくよくなりましたよ。印刷物もウェブページも。それに情報もよく集めておられますよね。本田 原先生が「この頃お茶大はとつても活気が出てきたし、ジェンダー研もよくやつて、私うれしいわ」と言つてらしたのとことでしたよ。波平 前センター長の原先生がたくさんセンターの業績として果実を残してくださつたので、見える形にすることがどうしても大事で見れば分かるでしょではなくて、はつきりと

見える事を心がけたんです。今でこそ、河野（センター専任教官）先生もおいで下さつて安定してきてますが、最初の頃は私も本田先生の所へもよく駆け込みました。本田先生はまた来たかと。篠塚 法人化後の中期計画では女子大として行く方向ですが、その後の皆さんの展望をお聞かせ願いますか。本田 今は乗り切つたと思つていますが、十年先は読めません。一つには日本の経済の動向で、財政が行き詰まつて、国立大学をいっせいに民営化するとか、国策に沿つた研究機関だけを残してあとは民営化するなどというような事が起こるかもしれない、確率としてはそう高くないかもしれないけれども、その時に、女子大で、この規模でいけるかは、正直言つて、分かりません。そこで女子大でやつていく場合は、ここ十年ぐらいの間に、同窓会や後援会組織との絡みも含めて、財政基盤をどうするかという事を一生懸命に考えなければいけませんね。女子大としてやつていけない場合ですが、あわてて共学化してもこれは大した事ありません。むしろ、本学がつつかつた女子教育のエッセンスが生かせるような統合をするという選択肢かなと思つたりします。これは最悪の事態ですね。そこまで行かないとしても、レゾナテールを明確にするために、こういう研究は世界的です、という部分を目立たせること、学部、大学院それぞれ段階で、どこに出しても大丈夫な学生を育てることを、明確な目標を作つて、力を合わせていくことが大事でしょう。お茶大は小さいけれども日本にあつて然るべきだという認識を、行政は一般納税者に持つていただければ、その後も大丈夫かなと思つてます。国際的な拠点として、ジェンダー研究とか発達研究を考えたら、お茶大抜きでは語れないみたいにしてしまえばよい、そういう形に持つていく事が必要かなと思つています。

(後半は次号に掲載します。引き続き本学の将来像、本学の学生や卒業生の魅力などが話題となります。)